

大人のひきこもりを何とかしたいと手を挙げたら 当事者たちによるご機嫌な動きが始まった

川初氏は「ソーシャルビジネスグランプリ2012冬」のグランプリ獲得者だが、紙幅の都合で取材が先送りになり、やっとご紹介できることになった。

ひきこもりも生き方の選択肢に

グランプリを受賞した社会起業計画は、「大人のひきこもり オルタナティブ・ライフ・プログラム」。従来「ひきこもり」は、主に青少年の問題として認識され、支援の対象も若者を前提とするものがほとんどだった。70万人以上とされる彼らのひきこもりは長期化し、40代、50代も多い。氏の弟も15年来、社会的ひきこもり状態が続き苦しんでいた。怠情でも人間嫌いでもない。ポタンの掛け違ひから誰にでも、ひきこもりは起こりうる。彼らの多くは、繊細だが、人の役に立ちたいと望んでいる。特定分野には高いスキルを示すこともある。

起業計画は、大人のひきこもり各人に合った、アウトソーシング可能な仕事を

提供すること、また、ひきこもりという選択を否定せず、生きていける道や社会のあり方を提案することだった。

グランプリから半年後の報告ステージで、「一時期何もできなくなった」と発言した氏を、正直心配した。しかし、一般社団法人コヨーテを設立、3年経って再会した氏の周りでは、心躍るイベントがたくさん開催されていた。「1000（庵）」という、ひきこもり当事者や家族、サポーターが集い、意見交換や交流をす



イベントには多くの当事者や家族が集う

る場は、東京都内で隔月開催されており、毎回1000人を超える参加がある。「ひきこもり大学」は、ひきこもり当事者が自ら講師になり、毎月どこかで開催される講座だ。2014年11月に開催された「ひきこもりUX会議」には、全国から300人が集った。「遠吠えラジオ」は、イベント後の懇親会で交わされる会話があまりにも面白いため、多くの人にも聞か

「死にたい」と言うひきこもり当事者から電話を受け、死ぬ前に一杯やろうよと、新宿ゴールデン街に誘って話したという。写真は取材後に、ごきげんなその街で撮った1枚。実は、氏自身も発達障害の一種の症状があり、デザイン事務所勤務しながらも、世間とじっくり来ない自分を感じていた。一方、過集中の傾向は、デザインやコピーライトの仕事をする際には有利に作用したという。

■連絡先
Mail: realogue@gmail.com

せたいと始めた、Ustream配信。人気を博したTV番組『ヨルタモリ』のノリだが、先に始めたのは彼らだ。

当事者が手を挙げて運営

展開される様々なイベントは、川初氏がアイデアを出して、グイグイと関係者を引っ張っているわけではない。取材した1000でも、冒頭のご挨拶にさえ登壇しなかった。自身の広報活動も積極的とは言い難い。不思議なことにとのイベントも、ひきこもり当事者たちが手を挙げ、サポータースタッフも現れ、ともに企画・運営をしてくれるのだそうだ。

近い将来、当事者たちとフラットな立場で、生業づくりや暮らしを支え合う仕組みを作るため、共同で「組合」を設立する話し合いも始まっている。

仕事だからと、心や体が嫌がることもやれて当然なのだろうか。川初氏や彼らは言う。「嫌なことをやって生きたくはない」「ごきげんに生きたい」。現在の社会システムのもとは受け入れられにくいかもしれないが、どちらが人間として当たり前の感性なのか。コヨーテは、かき乱す存在でもあるという。

シリーズ

社会起業家

一般社団法人コヨーテ代表理事

川初真吾氏に聴く